

総合型地域スポーツクラブ関係者のみなさまにお届けする各界からの

応援メッセージ 2012

（五十音順掲載）

■スポーツで日本を元気に！

朝原宣治 氏



元陸上競技選手（北京オリンピック銅メダリスト）、スポーツ解説者・指導者
スポーツ基本法の制定を受け、総合型地域スポーツクラブをめぐる動きが再び活発になってきました。かつてドイツの陸上クラブに所属しながら練習と試合をした経験から、私はこの仕組みが日本にできればいいのにと強く思っていました。今、文部科学省が提唱する「スポーツの好循環」がまさしく行われていたからです。ただ、スポーツの歴史も全く違う国の仕組みをそのまま真似をしても上手くいかないかもしれません。

私は競技引退後、私が社員として所属する会社（大阪ガス）にかけあって NOBY T&F という陸上クラブを立ち上げました。これは企業の社会貢献の枠組みの中で、企業のスポーツ資源（施設や人材）を活用しながら、自治体や大学、他企業との連携で子どもたちの健全育成を目的に運営されています。私だけではなく、陸上競技のトップ選手が、このクラブでコーチとして協力してくれています。

総合型地域スポーツクラブにはまだまだ長い道のりですが、選手支援や引退後のセカンドキャリアも見据え、独り立ちできるクラブを目指しています。このように、規模や形が違っていても、地域と連携し合い、できることからやっていくことが大切だと思います。そして将来、様々な特徴を持ったクラブが全国に広がっていき、スポーツで日本を元気にできるよう、みんなで盛り上げていきましょう！

■総合型地域スポーツクラブの自主自立と創造的活動への新たな挑戦

川西正志 氏



鹿屋体育大学 教授、日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 委員

国策として始まった総合型地域スポーツクラブの育成も全国に3,000以上のクラブを創設する勢いになってきた。スポーツ基本法やスポーツ基本計画においても、国民各層へのスポーツ機会の提供や公共性を担保するために総合型地域スポーツクラブへの期待は大きい。

文部科学省や日本体育協会など関係機関の努力によって全国に創設された総合型地域スポーツクラブは、スポーツ振興くじの支援を受けながら、今年で支援年限の5年目（自立支援事業）を迎えるところも多くある。クラブは最終的に財源も含め自主自立運営が基本である。外部からの財源支援が途切れたとき、クラブの行く末を心配する関係者は多い。

しかしながら、クラブにとって重要なことは会員にいかに関心あるプログラムを提供できるかであり、それと会員のクラブへのアイデンティティの確立である。適切な会費でクラブを運営していくためには、会費に見合う会員のニーズに合った運営であってほしい。また、クラブ活動を通じた地域コミュニティの形成への役割を担う思いを感じるクラブであってもほしい。全国各地に灯されたクラブの明かりを、次世代の青少年の豊かなスポーツライフの形成のために、より長く明るく輝かせるための新たな挑戦をしてほしい。

■総合型地域スポーツクラブの原点

黒須 充 氏

福島大学人間発達文化学類 教授

日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 副委員長



私は 1995 年初めて訪れたドイツで、家族と共にドイツのクラブライフを体験しました。その居心地の良さがどうしても忘れられず、帰国後、手探りのなか夢中で総合型地域スポーツクラブづくりを支援する組織「クラブネッツ」を当時三重大学の水上市博司先生と2人で立ち上げました。それが今からちょうど 14 年前の 1998 年 5 月のことでした。

あの当時、どうしてあそこまでこだわって“日本にも総合型地域スポーツクラブを作りたい”と思ったのか、あらためて振り返ってみました。そこには、満足なドイツ語も話せず見知らぬ日本人である私を温かく受け入れてくれたという、クラブの懐の深さを実感した私自身の経験がありました。内輪だけで楽しむ単なる仲良しクラブではない、クラブの大小に拘わらず、広く地域社会に開かれた社会公益性の高いクラブだからこそ、親、子、孫と世代が変わっても、受け継がれていることを肌で感じ取ったのです。

長続きしているクラブには、多くの人々から愛され必要とされている理由があります。それこそがクラブの原点であると思います。1人でも多くのファンが増える、そうしたクラブづくりを目指して一緒に頑張りましょう。

■総合型地域スポーツクラブ関係者の皆様へ

佐藤弘道 氏

タレント・体操インストラクター



いつも地域の皆様のためにご苦勞様です。

全国様々な施設を見させていただきますが、どこも本当に素晴らしいと思います。ただ「もったいない」と思うことも多々あります。もっと発信をし、1人でも多くの方にクラブの存在を知ってもらえたら、利用する側も運営する側も「幸せ」が増えるのではないのでしょうか。

場所によっては、現状に満足しているクラブ、パソコンが使えない人間と同じで良い施設の使い方がわからないスタッフもいます。

昔ながらの良さを生かしつつ、若い力を取り入れ、時には斬新なアイデアが浮かぶ環境づくりも必要ではないのでしょうか。

お年寄りを1人でも寝たきりにさせないことが、家族と地域の「幸せ」です。子どもたちにとっての良い環境づくりもお願いします。

今は病院や接骨院など、体を動かさなくなった所ばかりに人が増えています。クラブ本来の役割は、そこに行かせないための健康づくりです。地域の皆様の「平均寿命」ではなく、「健康寿命」をクラブの力で上げてください。私も応援しています。今後も頑張ってくださいね。

■スポーツを通じた日本の発展へ

間野義之 氏



早稲田大学スポーツ科学学術院 教授

日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 委員

指導者育成専門委員会 委員 マネジメント資格部会 部会長

2011 年は 50 年ぶりに「スポーツ振興法」が改正され、「スポーツ基本法」が制定されました。また、法改正を受けて、2012 年 3 月に「スポーツ基本計画」が策定され、これから半世紀を見通したわが国のスポーツのあり方が示されました。法制定と計画策定には多くの有識者が関わり、多様化する現代社会や複雑化する国際社会を見据えたなかで、「日本のスポーツの振興」から、「スポーツを通じた日本の発展」とパラダイムがシフトしました。

新しいパラダイムに対しては、スポーツを手段化するといった批判もありますが、社会発展に向けたスポーツの固有性や有効性が広く認められてきたともいえます。特に日常生活にスポーツが定着することによって、社会が抱える様々な問題解決につながるであろうという期待を透かしてみることができます。

つまり、多種目・多世代・自主・自立の総合型地域スポーツクラブが地域に根付いていくことで、人々の幸福、健康、安心などにつながることへの希望をみてとることができます。

1995 年に総合型地域スポーツクラブ政策が始まり、すでに 17 年目となります。これまで多くの人々の地道な努力によって、着実に全国に展開しつつあります。人口の 1%を超えるとブームが始まるといった言説もあるなか、総合型地域スポーツクラブの参加会員数があと少しで 1%を超えるところまで来ました。

「未来の子どもたちからの借り物である」社会を、より良く発展させて、彼らに渡すのは私たち大人の責任です。みんなで力を合わせて、あと一息を詰めて頑張ってください。

■楽しいことをたくさん企画して実行してみよう！

宮嶋泰子 氏



テレビ朝日アナウンサー

日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 委員

2012 年 3 月 21 日に「スポーツ基本計画」が文部科学省中央教育審議会から答申されました。審議会のメンバーとして議論を重ねてきた身としては、「総合型地域スポーツクラブ」という名称が随所に織り込まれたのを見て本当にほっとしました。

「総合型って何？」と聞かれた時代から、「総合型を知らないの？」という時代に入ってきたのです。

こんなことをすれば、スポーツで地域コミュニティが盛り上がるかもしれない！全国のクラブが互いに協力し合ってスポーツツーリズムの流れを作ってみたい！ホテルにレンタル用のシューズとノルディックウォークのストックを置いてスポーツツーリズムのお手伝い！中体連（公益財団法人日本中学校体育連盟）に入っていない女子サッカーのチームをクラブに作っちゃおう！なでしこ応援ツアーも組もう！などなど思いついては知り合いのクラブマネジャーに電話をしたものです。追い風が吹く今を逃さず、企画する人も、実際に実行する人も、みんな楽しみながらやってみましょう！

■こんな所にゲルマン魂あり

山本 浩 氏

法政大学スポーツ健康学部 教授

日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 委員



風の冷たさが消えた頃に、ドイツはミュンヘン郊外に女子のブンデスリーガ(ドイツのプロ・サッカーリーグのこと)を見に出かけた。お目当てはバイエルン・ミュンヘン女子サッカーチーム。バイエルン女子チームは男子と違って、リーグでの成績は芳しくない。

アシュハイムという、ミュンヘンから東に離れた街の3,000人ほどが入るスタジアムで、午後2時からの試合を見た。天気も悪くないというのに、観客の出足が悪い。不入りの原因を訪ねると、「W杯で優勝できなかったのが人気上昇にブレーキをかけている」と首を振る。

なるほどと思わせたのは、正面スタンドの真ん中に警備の担当者を貼り付けてしつらえたVIP用の飲食エリアだ。ベルトの上に大きくはみ出すおなかを見せて、ソーセージを頬張りビールをがぶ飲みする男たちには屈託がない。この日の入場者、わずかに210人。それでも、クラブとしての方針があるのか、大切な人を大事にもてなす姿勢を崩さないのだ。痩せても枯れてもプライドは捨てない。こんな所にもゲルマン魂は顔をのぞかせていた。

■クラブは「心のよりどころ」になれる

ヨーコ ゼッターランド 氏 元バレーボール選手、スポーツキャスター、

日体協 理事、日体協地域スポーツクラブ育成専門委員会 委員



昨年は「スポーツ振興法」が実に50年ぶりに改正となり、日本体育協会も創立100周年を迎えました。日本のスポーツ界にとって大きな節目の年となった2011年には、東日本大震災という未曾有の自然災害に見舞われ、多くの方々が被災し、尊い命が失われました。

日本全体が大きく揺れた中で、スポーツ界は「今、日本のために何ができるか」を問われた一年でもあったと思います。

日本の社会にとってスポーツは本当に必要とされているのかを自問しながら、私自身あらためて様々なことを深く考えさせられました。そして被災地をはじめ、全国を回りながらスポーツを通じて接した子どもたちやその家族、地域の方々から「YES」という答えをいただけたときは本当に嬉しかったです。

時間はかかるかもしれませんが、地域の中にあるクラブがスポーツを軸に世代や性別、価値観の相違を越えて多くの方にとってきっと「心のよりどころ」となれると信じています。